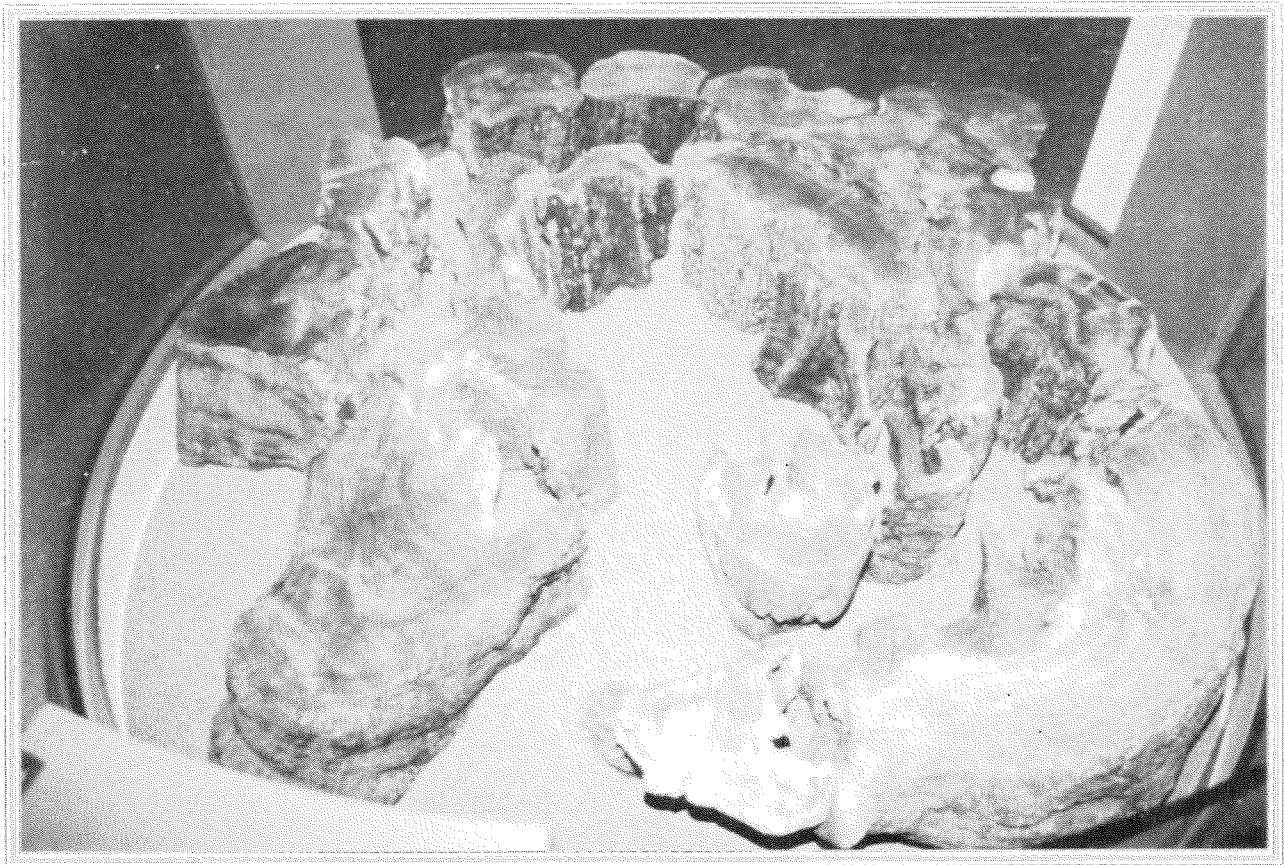


# あるむぜお 59

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 59

2002年3月20日



2 ケヤキ並木Part4 ケヤキ並木を維持するために

3 展示会への招待 「大伴家持と万葉の世界」「万葉集と武蔵国府」

4-5 ノート 2つに分かれた古代多磨郡

6 最近の発掘調査 魚?を刻んだ土製の錘

7 収蔵資料の紹介 消防道具だった纏

8 ナチュラルセブン 最終話「史上最大の観察」(後編)

## ケヤキ並木 Part4

表紙写真 保存されたケヤキ並木の御神木

Part 1 の表紙で紹介されている御神木は、昭和 27 (1952) 年に枯死したものの、その後も相変わらず、やはり御神木として親しまれてきました。しかし、あまりにも幹内部の腐朽が著しくなってきたため、やむなく伐採され、地上部を一定の厚さに切った円盤状標本として保存することになりました。伐採は昭和 57 (1982) 年に行われ、標本は昭和 62 (1987) 年の開館当初から当博物館で展示されています。

## ケヤキ並木を維持するために

御神木に代表されるように、「馬場大門ケヤキ並木」の歴史上、これを構成するケヤキの老木樹では、幹の腐れや空洞を目立たせるものが少なくありませんでした。これは、損傷部ができるとそこから枯死して、さらに木材腐朽菌類が侵害することによって起こり得るものです。通常、生立木では樹木の中心部から周辺部へと腐朽が進行しますが、菌によっては周辺の枯死部から侵すものもあります。この場合、樹木にとっては生きている部分である辺材を侵されることで、より直接的な害を受けるものとなり、かなり重度の傷害が生じます。腐朽は樹木の生長を妨げるばかりでなく、風・雪等の物理的圧力に対する抵抗性を著しく弱めてしまうのです。

度々並木下を歩いていると、幹の半分くらいから上部を切断された格好の老木樹に出くわしますが、これはそこだけ腐って消滅したというわけではありません。老朽した大木が倒れる危険性を考慮して、あるいは生長しすぎたケヤキが周囲の交通物体や架空線とせめぎ合わぬよう、わざと切り落とされた姿だったのです。ただし、これとて自由に手を下していたわけではありません。記録によれば昭和 46 (1971) 年、文化庁に天然記念物の現状変更案を提出して、大規模な枝下しを行ったとあります。ケヤキ並木そのものが指定された文化財(天然記念物)であることを考えれば、簡単には形(景観)を変えられないことがわかる例だと言えるでしょう。しかも慎重に考えなければならぬのは、切断することにより新たな被害を生じさせる場合があるということです。枝を落とすことで樹木全体の葉の数も減るわけですから、樹木そのものの活動の中心である光合成量が減退してしまうというわけです。

木材腐朽菌の子実体、いわゆるキノコの類いが外表に形成されることがあります。これは腐朽の度合いが相当進行している証拠でもあります。ヤドリギの寄生も問題になりました。ヤドリギの

実は、野鳥に運ばれて宿主の上で発芽し、そこから寄生が始まります。ヤドリギは自らも光合成を行いつつ何十年も寄生を続けるので、寄生部位はそこより上部で合成された物質の転流が阻害されるため、肥大して大きなコブになってしまうのです。寄生という点ではアブラムシ・カイガラムシといった種類も名を連ね、これらは自らの排泄物上にスス病菌を寄生させます。ただし、寄生植物の表面を黒くするだけで、枯死に至らしめることはありませんが、著しく美観を損なってしまうことに変わりはありません。

並木という形で成立する文化財を維持するという点では、相当な努力があったようです。長い時の流れの中で、新たにケヤキを補植することもありましたが、これもおやみに植えて樹間を密にしすぎると、披圧を受けた各々のケヤキの生長に影響を及ぼす場合があります。かつて大門は窪み、並木の部分は土手になっていたといいますが、これもケヤキが傾いてくるといった問題を抱えていたようです。

自然の山野にある樹木は、立地環境が生育に恵まれています。都市の街路樹は、あらゆる面でマイナス環境での生活を強いられています。前述の病虫害を始めとして、水分の補給不足、根張りの制限、人工物による高さや横幅の制限、排気ガス、熱射等、過酷な要素が山積みなのです。これを保護しようとするためには、あらゆる手段と検討を重ねていく必要があります。灌水、除草、施肥、整枝、剪定、病虫害の駆除、支柱の修理、補植、落葉の清掃、有毒ガスの排除など、その作業方法、時期、順序を考えて十分な効果をあげるべく維持管理を考える必要があるのです。自然界の生物を維持管理する、ましてや一本一本の集合体であるケヤキ並木を未来永劫保存していく道には、人々の理解と努力、そして自然を愛する思いが必要不可欠であることは言うまでもありません。



# 大伴家持と万葉の世界

# 三二展 万葉集と武蔵国府

5月22日(水)～6月9日(日)

5月19日(日)～6月23日(日)

(休館日 5/20・27, 6/3・4・10)

郷土の森博物館の一角に、万葉歌碑が建っています。「赤駒を山野に放し…」という防人の奥さんによる嘆きの詩です。武蔵国から駆り出された防人は、国府のある府中に集められてから出発したはずです。歌碑からは、これから越えていくであろう「多摩の横山」が望めますが、目的地は長い旅路の果ての九州だったのです。

その時の防人の一人に、秩父郡出身の大伴部少歳という男がいました。彼が詠みあげた歌の碑は、故郷・秩父の山里に古く江戸時代に建てられ、今も健在です。彼が国府に向かった道を逆にたどろうとすれば、JRと私鉄2本を乗り継いで2時間半、さらに日に数本しかないバスで揺られながらも、訪ねることができません。

埼玉県吉田町の中世武士の館跡といわれる場所に建てられたこの万葉歌碑には、彼が詠んだ「大君の命恐み愛しけ真子が手離り島伝ひ行く」の歌と、「武蔵嶺の小峰見隠し忘れ行く君が名かけて我を音泣くる」の東歌が万葉仮名で刻まれています。東歌の方は、もと

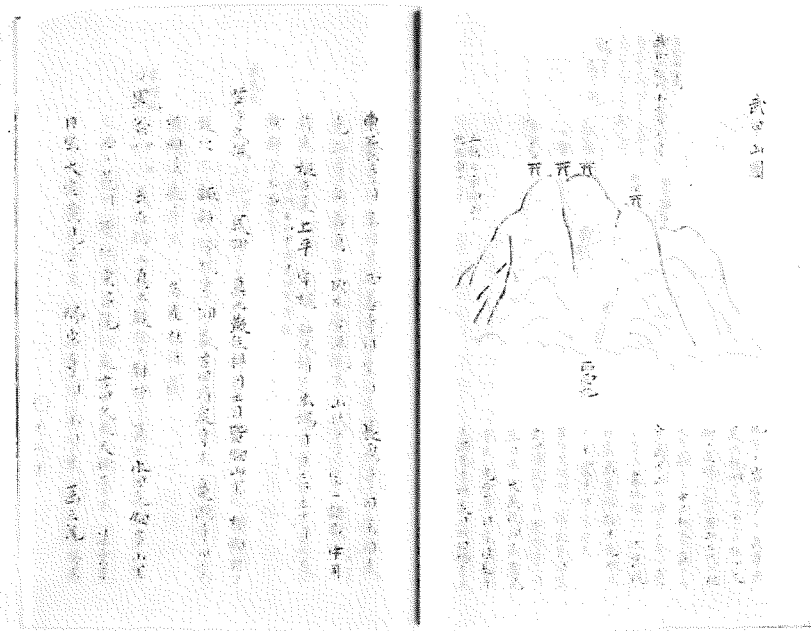


歌碑

もと「相模嶺」だったはずが、替え歌として「武蔵嶺…」があり、その両方が万葉集には掲載されています。

当館所蔵の「武蔵鑑 秩父郡」という題の古い写本をめくってみると、歌碑のことは触れられていないものの、「万葉力秩父郡大伴部少歳カ塚アリ」という記述が見つかります。また、秩父の霊峰・武甲山を描いた挿絵のところに「武蔵嶺…」の歌が引かれています。防人の伝承は出身地とされる地元にも深く刻まれていたようです。

越中(今の富山県など)に国司として赴任した大伴家持は、国府での宴を楽しみ、巡行先の風光に魅せられ、数多くの歌を詠み、これらが万葉集として結実しました。今回、「高岡市・府中市 国府のまち交流展」として、家持ゆかりの高岡市万葉歴史館の所蔵品を中心にした展示会を開催します。北陸でも、東国でも、国府を拠点に万葉の文化が地方に広がっていった様子を探ってみます。

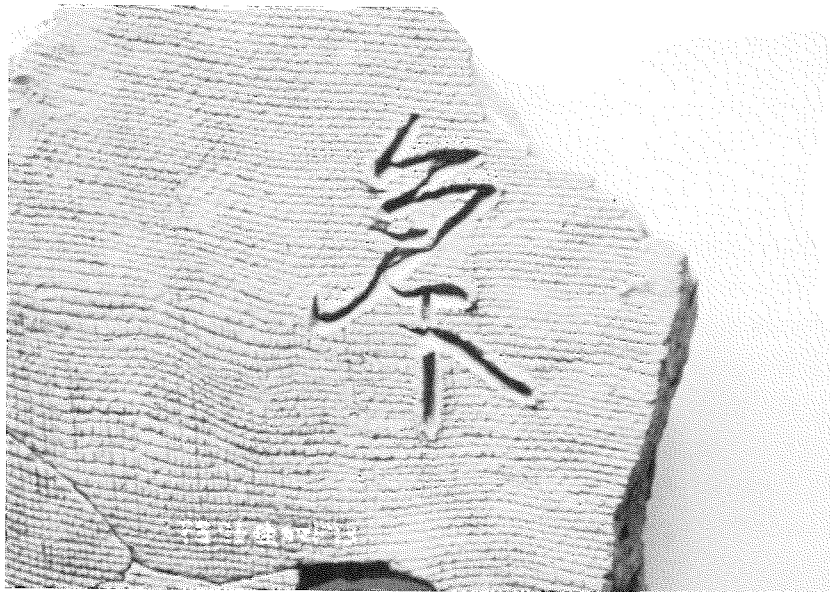


『武蔵鑑』

(Ono)

# 2つに分かれた古代多磨郡 文字瓦「多下」をめぐって

深澤 靖幸



武蔵台遺跡から出土した「多下」の文字瓦

## ▼武蔵台遺跡出土「多下」の文字瓦

A：文字瓦だね。国府の出土品かい？

B：いや、国分寺跡の西方にある武蔵台遺跡の出土品なんだ。この文字、「多下」で間違いないと思うけど。どうかな。

A：そうだね。問題ないけれど、どんな意味かな。

B：国府跡や国分寺跡からは、武蔵国内の郡名を書いたり、スタンプした瓦類がたくさん出土しているから。だから、「多」は多磨郡を意味すると考えるのが常識だ。問題は、「下」なんだ。

## ▼「多下」と「多上」

A：ほかに類例はないのかな。

B：実はいくつかあるんだ。まず一つ目は、かつて石村喜英さんが『武蔵国分寺の研究』（大善堂書店1960年）に掲載した資料で、国分寺跡から出土したという「多下」のスタンプ（右ページ図-1）。二つ目は、府中<sup>おおくに</sup>の<sup>たまた</sup>大魂神社境内で採集された「多上」。武蔵台遺跡の「多下」と同じように、焼きあげる前の瓦に文字を刻んだものだ（右ページ図-2）。このほかにも「多上」のスタンプの可能性が指摘されているものが、国府や国分寺の出土品に少しだけあるんだよ。でも、国分寺跡出土の文字瓦は膨大な量で、国府跡出土文字瓦はそれほどではないとしても200点を超えているから、「多上」や「多下」の文字瓦は僅か<sup>わず</sup>かといっているんだ。

A：いつ頃のもののなの？

B：武蔵台遺跡の「多下」は、国分寺の創建段階、つまり8世紀の半ばすぎ。国分寺の「多下」のスタンプは『武蔵国分寺の研究』に拓本が掲載されているだけ、国府の「多上」は拓本が国学院大学に残るだけで、ともに現物の所在が不明だから判断しにくいけれど、やっぱり同じ頃のものだろうな。

## ▼上・下に分割された古代の郡

A：「多下」ばかりでなく、「多上」もあるところがポイントだ。相模国の足上郡・足下郡や大和国の添上郡・添下郡といった郡名が浮かぶね。「一上」「一下」の郡名は全国にあって、本来一郡であったものが上下に分割された事例だったよね。

B：そう、そう。だから、「多上」「多下」はセットで、「郡名+上」「郡名+下」と考えたいところだ。

A：でも、古代の多磨郡が分割されたという記録や史料はないだろ。

B：確かにそうだけれど、古代の郡の分割は、「一上」「一下」というパターンに限らず、結構頻繁だろ。分割の理由まで記録されるケースが少ないけれども、摂津国河辺郡から能勢郡の分割は、郡家<sup>ひんぱん</sup>（郡の役所）から遠く道が険しい<sup>けわ</sup>といった地勢的な理由が述べられているよ（『続日本紀』和銅6年9月19日条）。このほかにも、遠江国長田郡の分割や、加賀国加賀郡から石川郡の分割

でも、似たような理由が挙げられているんだ。

A：確かに古代の多磨郡域は、今日の多摩地域と世田谷区の一部を含んでいて、武蔵国内では秩父郡に次いで広大だったから、分割される要因があったことは認めるけれど…。多磨郡が史料上に初めて登場するのは宝亀3年(772)だから、いったん分割された多磨郡が、間をおかずに再び統合したとは考えにくいと思うな。

B：もちろん、多磨郡が古代に分割されていた可能性はきわめて低いだろうね。

### ▼ 郡役所の出先機関

B：実は、河辺郡から能勢郡を分割した記録は、もう一つ興味深いところがあってね。実際に分割されるよりも以前から、館舎を建てて郡に準じた措置をとっていたというんだ。能勢郡は結果として分割されたけれど、分割されなかったケースもあり得るはずだ。

A：多磨郡がそうしたケースの一つということか。確かに最近、郡家とは別に官衙(役所)的様相の強い遺跡が全国的に見つかっていて、その位置付けをめぐる議論が活発だ。その一つに、そうした遺跡を郡家の出先機関として位置付ける考えもあったね。

B：そう。考古学の側では山中敏史さんが、さっき言った能勢郡の分割記事も用いて、鳥取県の戸島・馬場両遺跡を説いているし(『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房1994)、文献史学の側からは平川南さんが、郡符木簡を検討するなかで兵庫県の山垣遺跡をそうした遺跡として評価しているんだ(『郡符木簡』『律令国家の地方支配』吉川弘文館1995)。むろん、戸島・馬場両遺跡のある因幡国気多郡も、山垣遺跡のある丹波国氷上郡も、当時分割されていない。だから、郡家の出先機関は、普遍的とはいえないまでも、相当数の郡に設置されていた、と思うんだ。それは、郡内の行政が地域的に分割されていたことを意味するはずだ。

### ▼ 古代多磨郡の地域編成区分

A：つまり、古代多磨郡は分割される要素を備えていながら、結果として分割はされなかったということだね。

でもそれなら、多磨郡内に存在したはずの郡家出先機関の所在を明らかにするか、さもなければ、上・下に分割されるような地勢的な境界線を想定する必要があるね。

B：厳しい注文だね。多磨郡家の所在が国府内に想定できるからには(拙稿「国府のなかの多磨寺と多磨郡家」『国史学』156 1995年)、出先機関は国府から離れた地域に求めたいところだけでも、多磨郡域の古代遺跡の発掘は、国府・国分寺とその周辺や多摩ニュータウンに

偏<sup>かたよ</sup>っていて、西部や世田谷区域などの情報が少なすぎるからね。

A：多磨郡の地勢は単純で、国府から地形的に隔たった地域も見出しにくいね。しいて指標を求めるなら、多摩川かな。

B：そうだね。ただ、上野や下野から国府を目指して南下してくる東山道と、相模から北上してくる官道をつなぐと、多磨郡域を東西に2分することになるから、こうした官道が境界になった可能性もあると思うんだ。まあ、どのみち、可能性の域を出ないけど。

### ▼ 瓦の貢納単位としての多上と多下

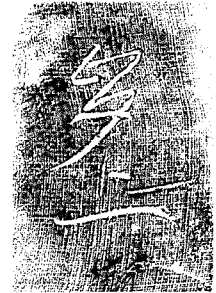
A：郡家の出先機関の存在や二分割された境界はともかくとして、国府跡や国分寺跡から多量に出土している郡名瓦は、それらの造営にあたって武蔵国内各郡の協力を得て行われていたことを示すものだろ。つまり、各郡は瓦類を納める単位になっていたんだ。この点に注目すれば当然、郡名を含む「多上」や「多下」も、瓦の貢納単位とみなすべきだ。郡家出先機関の存在を推測するのは現段階では難しいとしても、多磨郡内に上・下という地域編成の区分があったことは認めてもいいんじゃないかな。

B：要するに、古代の多磨郡は分割される要素を持っていて、郡家の出先機関を設けていた。これによって郡内の行政は上・下に二分され、国府・国分寺の造営に際して、瓦の貢納単位ともなっていた、ということだ。その蓋然性は高そうだね。

「多下」や「多上」の文字瓦は、一郡内の地域編成区分の内実や機能を考えさせてくれる資料なんだね。



1

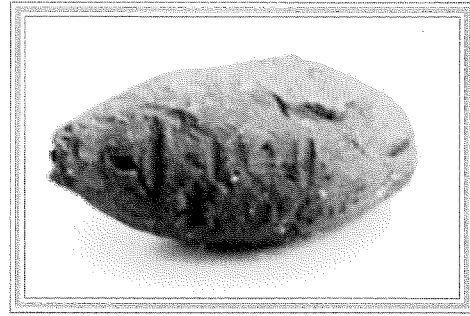


2

「多下」のスタンプと「多上」のへら書き文字  
(1：『武蔵国分寺の研究』より、2：国学院大学所蔵拓本)

# 魚？を刻んだ土製の錘

美好町1丁目 東電別館地区から  
府中市教育委員会 荒井 健治



魚？を刻んだ土錘

今回は、美好町1丁目の「東電別館地区」で出土した平安時代前半の土錘のお話です。

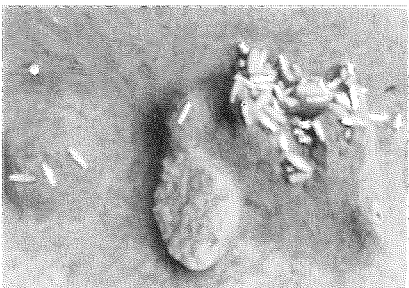
土錘とは字のとおり、土でできた焼き物のおもりで、ナツメ形をしていて、真ん中に紐を通す穴があいています。魚網のおもりなどに用いられ、現在でも素材は鉛や鉄に替わりましたが、形についてはほとんど変わらないまま用いられています。

ただし、府中市内で見つかる土錘の多くは、投網等で使うと生じるであろう痛んだ跡が見られないことから、網のおもりばかりではなく、編布を作る際に用いたおもりの可能性もあります。

それはともかく、東電別館地区出土の土錘には、写真のような線や点による表現が施されていました。これが何を表現しているのか意見が分かれるところですが、魚という意見が有力です。ただし、編物のおもりだとすれば、なぜに魚を刻んだのかといった疑問が生じます。

では、国府内で見ついている土錘全てが、織物のおもりかと言いますと、必ずしもそうではありません。川もない立川段丘上、ハケから700mも奥まった府中町2丁目の「ロイヤルパレスM地区」でも、投網の一部と思われる土錘は見つかっています。非常に残念なことに、竪穴建物の全体を調査できなかったことから、残された土錘の全を発掘していない可能性があります。188個まとまって出土しています。これらの土錘は、全て表面が摩滅しているとともに、多くは、紐を通す穴の先端の一部が穴の径の幅で欠けていました。おそらく、一方向に力がかかる状態で紐に通されていたため、投網等に用いた際の使用痕跡と推定されます。なお、投網については、網が広がって水底に着いた後、これを絞っていく際、水底と網に隙間をあげないため、おもりを密に配する必要があり、ナツメ形のおもりのほかに、鎖状のおもりも用いられることがあります。ナツメ形のおもりの場合は、網の大きさにもよるでしょうが、300個程度は必要なようです。そこで、ロイヤルパレスM地区で見つかったものについて復元しますと、土錘の平均的な長さは約3.5 cmですから、土錘と土錘の隙間を1.5cmあけるとして、 $(3.5+1.5) \text{ cm} \times 188$ 個で9.4 m、すなわち網の周囲9.4 mとなります。これを径に直すとわずか3 mで、投網としてはやや小さいようです。やはり、今回掘れなかった部分にまだ残っているのでしょう。

では、川から離れた国府内で、なぜ網が出土したのか。国府内で漁業を生業にしていたとは考えにくいので、おそらくはふるさとを離れ国府へ赴く際、自己消費分をまかなうためにでも持ってきたものでしょう。今回出土した魚とおぼしき表現を施す土錘も、あるいはふるさとの川を思い、作られたのかもしれない。



ロイヤルパレスM地区で出土した土錘  
投網用の可能性が高い。

# 消防道具 だった纏

佐藤 智敬

現在、府中市郷土の森博物館に唯一寄贈されている纏です。なんと読むかわかりますか？

このマトイをよく目にするのは時代劇で北島三郎などが演ずる江戸の町火消が、火事の時に振り回しているときでしょう。もとは戦国大名の旗印の一種だったようですが、天下泰平の江戸時代になり、暴れん坊將軍徳川吉宗が大岡越前らに制定させた町火消の旗印に利用されました。

江戸では、い組、ろ組、は組といった47の組（後に48組）に分かれそれぞれの地区の防火、消火につとめてきました。火消たちの集合の目印になるのみならず、下のほうにあるヒラヒラした部分のゆれ方で風向きを知り、火がまわりやすい方角を判断し、その方向にある建物を鳶口などの道具でぶっこわす目安にしたわけです。俗に破壊消防と言われるやつです。なにしろ当時はポンプの技術が発達せず、竜吐水という、木製の水鉄砲みたいな道具とか、玄蕃桶なるバケツで水をちよつとずつかけるだけだったので、火を消すには燃えるものを少なくする、すなわち破壊がてつとりばよかったわけです。その際、纏はその組の旗印として、組の中でもっとも技量、度胸のある人間が持つ名誉なものだったようです。

江戸時代の府中には、町火消制度はなかったようで、多分消防と纏が関係してくるのは明治維新後のことです。纏は火消のシンボルとなり、明治維新後の府中で「消防組」（現在の消防団の前身）が編成された時には、その影響からか、各消防組が纏を所有し、「纏持」という役職がありました。纏持は組頭、小頭に次ぐ三番目に偉い役職で、火事の際真っ先にかけつけ、水口を見つけるなどの獅子奮迅の働きを要求され

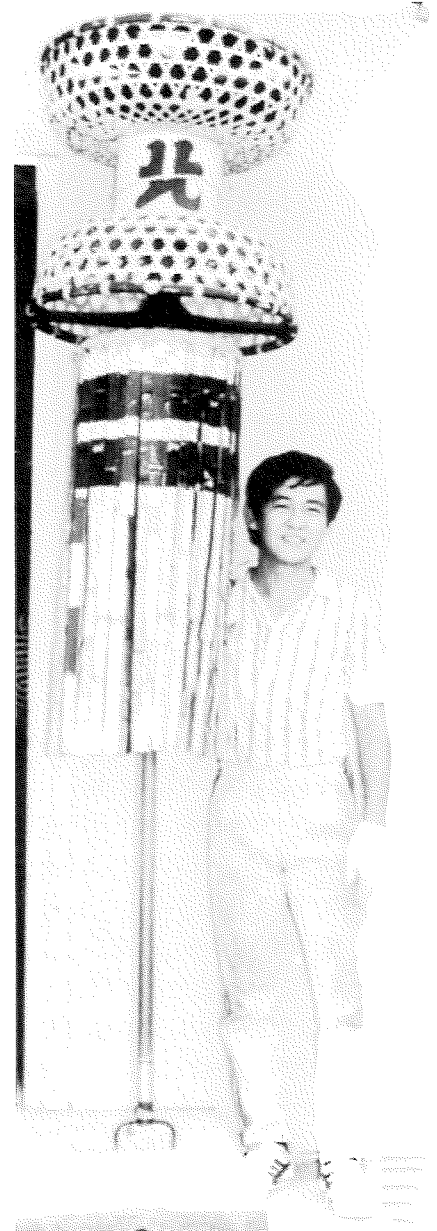
ていたようで、そのへんは江戸の町火消と同じですね。

『府中の消防』で市内の消防関係の史料を眺めると、大正年間くらいまで「纏持」という役職が存在したことがわかります。纏自体は昭和初期まで使用されていたようですが、その役割は旗にとって変わられているようです。ただ、目立つものだから、昭和になってからも記念写真に写っていたりします。確かに今でも纏があったらカッコイイし……。

現在、纏は東京に限らず全国各地に残っていますが、消防の際の道具としてではなく、「纏振り」という芸能の小道具や、消防団のシンボルとして保管、利用されている場合が多いようです。中には消防小屋にしまったままのものも、こうして博物館に保管されているものもあるのでしょうか。

写真の纏は近代以降につくられたものですが、紙や木で作られている割に意外と大きくて重い！ ミニ展示に出すために1階の収蔵庫から2階の展示室にあげるのも面倒さがる私は、これを持って火事場に駆けつけ、掲げている人の体力と気力には敬服します。

ところで私は、博物館内で行われた消防訓練で、逃げ遅れた人を誘導する際、自分自身が怪我をし逃げ遅れ、消防隊に救助される人という役割を与えられました。「大丈夫ですかー!!!!」と呼びかけられ、肩を貸してもらい救急車で包帯を巻かれ消火の役には立たず……。間抜けではありますが明日のわが身かも……。今が明治の昔なら、私が纏持ちの役職につく日はあったのでしょうか？ 纏やら旗やらを持っていたほうが自分には害がないなんて思っているようではだめなんだろうなあ。



# ナチュラル セブン

## 最終話 「史上最大の観察」(後編)

中村 武史

秋風が多摩川を寂しく吹き抜けていった。…あの歴史的決裂から2ヵ月半が過ぎようとしている。この日は河原の昆虫観察会であったが、講師であるヒラオカ団員の心中は重苦しかった。情性に任せた進行に、自身で歯がゆさを感じながらも、一向に気分が高揚しない。あの一件以来どうしようもなく切ないのだ。この世に奇跡が存在するのなら、今こそ起こして欲しいと願うばかり…果たして事実に基づいた創造の世界はこの窮地を救えるのだろうか？

自然観察会の参加者にとって、興味の対象は、何もその日に与えられたテーマばかりとは限らない。目にするものは何にでも疑問を抱くことが常である。案の定、目をギラギラと輝かせながら少年が訊ねる。「ねえ先生、この河原に何本も生えているのは同じ木？」不意打ちを食らったように、一瞬戸惑いの表情を浮かべたヒラオカ団員の背後から、聞きなれたあの声…「ハリエンジュですよ、ニセアカシアとも呼ぶけどね。」「…イ、イズミ団長！」「やあ久し振り、今日はあんなことがあってから初めての観察会だろう？ちょっと気になってさ。」「そうですか、よくぞ来て頂いて…嬉しいです。」まさに暗雲の切れ間から一筋の閃光が差したかのごとく、ヒラオカ団員のボルテージは一気に上昇、いつもと変わらぬ観察会が戻って来た。

「ねえ、そのニセアカシアの梢で何か鳴いてますけど？」今度は年輩の参加者からの質問。「え〜と、あれはモズの高鳴きでしょう。」とその時、上空のチョウゲンボウを威嚇する2羽のセキレイが目に飛び込んで来た。「あの鳥は？」咄嗟のことで喉をつまらせるヒラオカ団員をフォローするように、「セキレイですよ、腹部の黄色が目立つでしょう？」「…ああ、ソーマ副団長！」「やあやあ、ご無沙汰。偶然ですなあ、今日は観察会？」と、横から「何をとほけて…知っていたんでしょ？」イズミ団長が見透かすような口調で言葉を返す。「これはこれは、団長もいらしてたんですか、思いは一緒ってことかな…」

奇跡は起こった！一人二人と、調査団員が河原に集結を始めたのだ。極めて自然な表情の奥に熱い思いを

抱きながら…。団長、副団長も感激の面持ちで、目前の川の流れに、こみ上げる思いを映しながら風を感じていた。「…そう言えば多摩川もずいぶん変わりましたね。」団長がつぶやくと、「川の流れは人生のよう…紆余曲折を重ねても、水はひたすら一方向に進んでいくだけ。」と、ソーマ副団長が噛み締めるように囁く。すると続いて、「その流れを変えるのは、人間という外圧なのかも…」エッ？その声は、「ああ〜、シマムラ班長！あれあれ地理班の皆さんも。」「いやどうも、しばらく…だね。」少々バツの悪そうな表情で笑顔を作る班長を見ていると、あの日のことは遠い夢のような気がした。そう、言葉は無用、絆はしっかりと保たれていたのである。シマムラ班長が声高らかに、「皆さん、今日はスペシャル観察会だ！

さあ、今からこの多摩川がこの先どのように変わっていくのか、説明しますよ。そもそも川の姿は…」

満足げな表情を浮かべる参加者を前に、イズミ団長が特別な思いで総括する。「本来は昆虫目当てでお集まりの皆さん、思いがけず河原全体の観察ができましたね。…^^もうわかりでしょう、どんな自然環境にも、様々な植物や

動物の繋がりがああるんですな。ひとつのことだけを見ても、本当は理解できないんですよ。足元の自然を包括的に大きな視点から眺める、これこそ史上最大の観察じゃないでしょうか？規模の大小は関係ないんです。そう思いませんか！」「そうだ、当たり前のようにそれを続けてきたはずだったんだよね、私達は目先の華やかさに捕われ過ぎたかな。」シマムラ班長の声に全団員が同意見であることは明らかだったが、内情を知らない参加者は不思議そうにただ頷くばかりであった。

人生七転び八起きと言うが、まさに自然観察の基本を再認識させられた調査団の結末は、さらに強固なものとなった。秋風吹き荒ぶ河原を自指し、心の通い合う者同士が再び集まったことは必然であり、決して偶然ではなかった。各々に刻み込まれた、「俺たちは自然調査団なんだ」というプライドがある限り未来永劫、不滅のロードを歩み続けることだろう。…草場の陰からソネ氏が笑ったような気がした。



昆虫観察会風景